

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 6月 18日現在

機関番号：82674

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530649

研究課題名（和文）社会関係が高齢者のウェル・ビーイングに与える効果の差異に関する研究

研究課題名（英文） Study of different effects of social relationships on elderly well-being

## 研究代表者

小林 江里香 (KOBAYASHI ERIKA)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）

・東京都健康長寿医療センター研究所・主任研究員

研究者番号：10311408

研究成果の概要（和文）：高齢者において、社会関係が心理的 well-being (WB) に与える効果が、性別や年齢などの個人属性によってどのように異なるかを検討した。先行研究のレビューや調査データの二次分析の結果、社会関係の多寡や、社会関係が WB に与える効果には、性別による差異がみられたが、これらの差異は、社会関係の種類や WB の指標によっても異なり、男性高齢者の場合は、配偶者の有無による差も大きかった。女性高齢者は、男性高齢者に比べ、友人や近隣との私的交流が多だけでなく、子どもを含む、これらの私的な関係が生活満足度に与える影響が強い傾向がみられたが、抑うつ傾向を WB の指標とした場合は、この関係を支持する証拠は得られなかった。他方、男性高齢者は、私的な関係よりもむしろ、フォーマルな社会参加（グループやボランティア活動への参加）によって WB が高まる傾向がみられた。社会関係の WB への効果には、性別だけでなく、年齢や学歴などによって異なる可能性もあるが、この点については十分なデータが得られず、今後の課題として残された。

研究成果の概要（英文）：This study examined how the effects of social relationships on psychological well-being (WB) among the elderly differed by personal attributes such as gender and age. Review on previous research and results of secondary analyses on survey data show that quantity of social relationships and their relationship with WB differ by gender, but there are further differences due to type of social relationship and WB indices. Among elderly males, the results also differed greatly due to existence of spouse. Compared to males, elderly females had more informal social contact with friends and neighbors, and these informal relationships including those with children showed stronger positive effects on life satisfaction. However, when depression was used as WB index, the gender difference seen above was not observed. On the other hand, elderly males' WB tended to be higher due to formal social participation (i.e., participation in groups or volunteer activities). The effects of social relationships on WB may differ due to age and education as well, but data were insufficient and these factors need to be examined in future research.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者、社会的ネットワーク、ジェンダー、生活満足度、抑うつ、社会参加

### 1. 研究開始当初の背景

高齢者の心理的 well-being (WB) を高める上で重要な要因は何かということは、学術的にも政策的にも重要な課題であり、これまでに多くの研究が行われてきた。しかし、個々の要因が WB とどの程度強く関連するかは、その人の置かれた状況や人生における価値付けによって変わる可能性があり、今や国民の約 4 人に 1 人を占める「高齢者」の WB を、一律の枠組みで評価することには限界がある。

家族や友人・近所の人との交流や、地域組織への参加などの社会関係や社会活動（以下、社会関係）もまた、高齢者の WB を高める重要な要因として注目され、健康や死亡率にも影響を与えることが、国内外の研究で確認されてきた。高齢者の社会関係には、性別、社会経済的地位（学歴、収入など）、年齢などによって差異があることが報告されている一方で、社会関係が WB や健康に与える効果が、個人属性によって異なることを示した研究も少なくない。例えば、性別についてみると、女性は男性に比べて、友人や近所の人との間に親密な関係をもつことが多くの研究で示されているが、Pinquart & Sörensen (2000) のメタ分析の結果によれば、これらの社会関係と生活満足度との関連性は女性においてより強い。逆に、配偶者のいないことが死亡率を高めるリスクは、女性よりも男性で高い傾向が示されており (House, Landis, & Umberson, 1988)、ボランティアなどのプロダクティブな活動が WB を高める傾向は、男性においてより強いという報告がある (Sugihara, et al., 2008)。

また、年齢と社会関係との関連について、社会情緒的選択理論 (Carstensen, 1991) では、高齢になるほど、社会関係の情動的機能よりも情緒的機能を重視するようになり、ポジティブな感情を得るのに役立つ長年の友人や親族との相互作用を選択的に行うようになると主張している。この理論に基づけば、より多くの人と関係をもつことは、高齢の人より若い人においてより重要であり、ネットワーク規模と WB との関連性には年齢による差異があると考えられる。

このように、高齢者において、社会関係と WB の関連性の強さが、個人属性や、社会関係のどの側面を測定するかによって異なることを示唆する理論や実証研究は散見されるものの、十分に体系化され、統一的理解を得るには至っていない。

### 2. 研究の目的

本研究は、性別、年齢などの個人属性によって、高齢者の社会関係の多寡や、社会関係が心理的 well-being (WB) に与える効果がどのように異なるかを明らかにしようとするものである。

分析枠組みとしては、図 1 に示すように、個人属性、社会関係、WB という 3 つの変数カテゴリまたは概念と、それぞれの間を結ぶ 4 つのパス (①~④) を想定した。社会関係については、まず、個人的 (私的) 関係と、グループ参加、ボランティアなどのフォーマルな社会参加を区別し、個人的関係については、さらに親族関係と非親族関係に区別した。

本研究の主目的は、社会関係が高齢者の WB に与える効果が、個人属性によりどのように異なるのか、つまり個人属性と社会関係の交互作用の有無と内容を明らかにすることにある (③)。

また、自身の WB にとって重要な社会関係を選択的に形成している場合もあるが、重要であっても何らかの制約により形成できない場合もあり得る。そこで、上記で得られた属性別の社会関係と WB との関連の強さが、属性別にみた社会関係の多寡 (①の関係) とどのように対応しているかについても検討する。これによって、WB にとって重要でありながら、実態としては社会関係が相対的に乏しい傾向にある、支援の必要性が高い人の特徴を明らかにする。

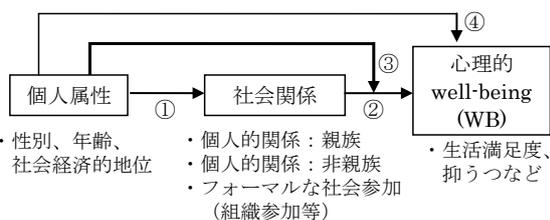


図 1 分析枠組み

### 3. 研究の方法

#### (1) 先行研究のレビュー

前述の Pinquart & Sörensen (2000) では、英語または独語の論文をメタ分析の対象としていたため、日本の高齢者を対象とした研究を中心にレビューした。

対象文献は、ダイヤ財団が Web 上で公開している社会老年学データベース (DiaL) に

登録されている、2011 年末までに刊行された雑誌論文の中から、社会関係（ネットワーク、サポート、社会的支援、社会参加、社会活動、ボランティア）と well-being（主観的幸福、満足、モラル、ハピネス、自尊心、孤独、うつ、QOL、自己効力感、精神健康、心理的健康）との関連をみた実証研究を抽出した。その他、海外のデータベース（AgeLine 等）を利用して、日本人高齢者を対象として英語で書かれた論文を追加した。なお、対象者の平均年齢が 55 歳未満の文献は除外した。

文献の整理においては、a) 図 1 の③の関係への注目の有無と個人属性の内容、b) 社会関係の領域と指標、c) WB の指標に着目した。

## (2) W 市高齢者調査データの二次分析

### ① 調査対象者と方法

首都圏郊外の W 市において、世帯類型に関わらず抽出された 65 歳以上の調査（一般調査）と、住民基本台帳上の一人世帯の高齢者全数を対象として、2008 年度に実施された。郵送配布・回収と民生委員による配布・回収を併用し、一般調査は 1,773 人 (70.1%)、一人世帯調査は 1,141 人 (69.5%) より回答を得た。一般調査または一人世帯調査において同居者なしと回答した人を独居群（男性 286 人、女性 692 人）、一般調査において同居者ありと回答した人を同居群（男性 759 人、女性 770 人）として分析した。

### ② 心理的 well-being

15 項目版高齢者用抑うつ尺度（GDS）で測定した、抑うつ傾向とした。

### ③ 社会関係の指標

社会的ネットワーク（SN）として、別居親族／友人・近所との対面／非対面接触頻度、グループ参加（加入なし、月 1 回未満、月 1 回以上）を測定し、社会的支援（SS）は 6 項目のサポートについて「同居・別居の家族や親戚」「友人・知人や近所の人」の中でサポートを期待できる人が「いる」と回答した項目数（各 0～6）を、親族サポート、非親族サポートの得点とした。

### ④ 分析方法

同居者有無と性別を独立変数、SN、SS、抑うつを従属変数とする分散分析を行い、次に抑うつを目的変数、SN、SS、年齢、IADL、学歴、就労、収入等を説明変数とする重回帰分析を 4 群別に行った。

## (3) 全国高齢者のパネル調査の二次分析-1

### ① 調査対象者と方法

東京都老人総合研究所、東京大学、ミシガン大学が、1999 年と 2002 年に実施した、全国高齢者パネル調査のデータを用いた。調査

は、訪問面接聴取法により行われ、回収率は約 75% であった。1999 年調査では、1987 年～1996 年から、3 年ごとに追跡されていた追跡対象者（99 年当時 63 歳以上）に加え、新たに 70 歳以上の大規模標本が追加された。

分析 1 では、99 年と 02 年の両調査に回答した者を、年齢層（前期：63～74 歳、後期：75 歳以上）と性別の 4 群に分けて分析した。対象数は、前期男性が 782 人、前期女性が 914 人、後期男性が 320 人、後期女性が 612 人。

### ② 心理的 well-being

生活（人生）満足度と抑うつ傾向の 2 種類について検討した。生活満足度は、LSIA からの 3 項目（0～6）、抑うつは CES-D 尺度からの 7 項目（0～21）である。

### ③ 分析方法と社会関係の指標

3 年後（2002 年）の WB を目的変数とする重回帰分析を性・年齢層による 4 群別に行い、1999 年の WB および年齢、慢性疾患、収入、就学年数等をコントロールした上で、社会関係が 3 年後の WB に与える影響をみた。

社会関係については、家族ネットワーク（配偶者、同居子、別居子交流頻度）はすべての重回帰分析に投入し、相互の相関が強いものが含まれる以下の変数については、1 つずつ投入して、WB への有意な効果がみられるかを調べた。

検討した家族以外の社会関係の指標は、以下の通り：親友数、親しい近隣数、対面接触頻度、所属グループ数、グループ参加頻度、情緒的サポートの受領／提供の程度と授受のバランス、手段的サポートの受領の程度、ネガティブサポート。

## (4) 全国高齢者のパネル調査の二次分析-2

上記(3)の分析では、年齢層による違いが、1999 年以前からの追跡対象者と 1999 年の新規対象者の違いを反映している可能性があることや、社会関係の変数を 1 つずつ投入したことにより、どの変数の効果が大きいのが不明であるといった限界もあった。分析 2 では、この点の改善を試みた。

### ① 調査対象者と方法

(3)と同じ全国高齢者のパネルデータより、1999 年当時 70 歳以上の対象者について、パネルの種類（A=99 年の新規標本、B=87～90 年から追跡）と性別により 4 群（A 男性=410 人、A 女性=602 人、B 男性=338 人、B 女性=543 人）に分けた。

### ② 心理的 well-being

(3)と同じ、生活満足度と抑うつである。

### ③分析方法と社会関係の指標

共分散構造分析の多母集団同時分析の手法により、図2のモデルを検討した。

社会関係については、インフォーマルな関係と社会参加との比較を可能にするため、質的なサポート関連の指標は用いず、量的なネットワークの指標のみ用いて、「子どもとの交流」「(非親族との)私的交流」「社会参加」を潜在変数(因子)とした。これら3因子の各観測変数は次の通り：[子どもとの交流]同居家族数、子どもとの接触頻度、同・近居子数、[私的交流]親友数、近隣数、友人等との対面接触頻度、非対面接触頻度、[社会参加]グループ数、グループ参加頻度、奉仕活動数、奉仕活動頻度。

配偶者と就労の有無は、独立した外生変数として扱い、主観的経済状態を経由するWBへの間接的パスもモデルに含めた。

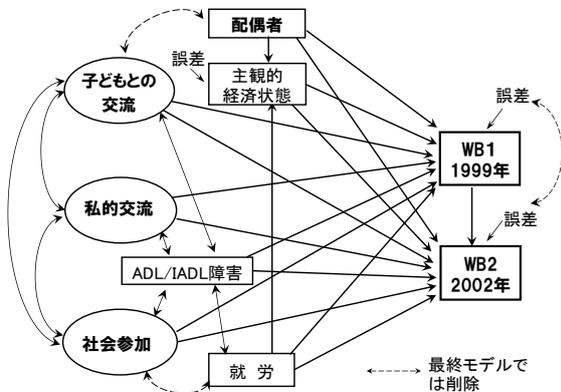


図2 パスモデル(共分散構造分析)

## 4. 研究成果

### (1)先行研究のレビュー結果

社会関係とWBとの関連性を属性別に算出したり(例：性別に重回帰分析を行う)、WBに対して社会関係との交互作用が検討されている個人属性としては性別がもっとも多く(該当論文数26編)、次に、年齢(74歳以下と75歳以上など)が多かった(7編)。職業、収入、学歴などの社会経済的要因により層化した分析例はほとんどみられなかった(1編)。

もっとも、性別、年齢に関しても、社会関係の種類や測定方法およびWBの指標が研究によって異なるため、結果を比較可能な文献数は少なかった。その中で、配偶者の有無とWBとの関連の男女差の結果については、WBの指標に関わらず比較的一貫しており、有配偶者ほどWBが高い(生活満足度が高い、抑うつが低い)傾向は、女性高齢者より男性高齢者においてみられた。

### (2)W市調査の分析結果

グループ参加者ほど抑うつが低い傾向は、4群(性別×同居者の有無)で共通していたが、別居親族や友人・近所の人との接触と抑うつとの関連の仕方は、性別だけでなく同居者の有無によっても異なっていた。独居男性の場合、親族・非親族との対面接触や、グループ参加、就労によって社会とのつながりをもつ人ほど抑うつが低い傾向が、独居女性や同居者のいる男女以上にみられた一方、実態としては、最も社会関係が乏しく抑うつ度が高い傾向があり、社会的孤立を防ぐための介入対象として優先度が高い集団であることが示された。

また、男性高齢者では、同居者の有無は、配偶者の有無とほぼ重なっており、社会関係とWBとの関連の強さが、性別に加えて、配偶者の有無によっても異なる可能性が示唆された。

### (3)全国高齢者のパネル調査の分析1の結果

配偶者の有無については、生活満足度、抑うつともに有意な効果はみられなかった。

友人等との対面接触頻度が高いほど3年後の生活満足度は高いという関係が、年齢層(前期・後期)や性別に関わらずみられたが、子どもとの同居や別居子との接触頻度の効果は一貫しなかった。グループ参加については、前期女性と後期男性において生活満足度へ正の効果がみられた。

サポートに関しては、女性では、サポートを受領できるほど抑うつが低く、生活満足度が高い傾向があり、この傾向は特に後期女性で強かったが、男性ではこのような関係はみられず、前期男性ではむしろ、情緒的サポートを提供する人ほど満足度が高かった。ただし、性や年齢層によるサポート受領の効果の違いは、サポート源の違い(男性では配偶者、女性では男性に比べて子どもが多い)による可能性もある。

### (4)全国高齢者のパネル調査の分析2の結果

ネットワーク因子の配置・測定不変性を確認した上で、因子平均を比較した結果、「私的交流」因子は男性より女性で、「社会参加」因子は女性より男性で高かった。また、「私的交流」と「社会参加」因子の間には、 $r=0.6$ 程度の相関がみられた。

3年後のWB(WB2)への総合効果(直接効果+WB1を経由した間接効果)でみると(表1)、「子どもとの交流」の生活満足度への効果は女性でより強くみられた。「私的交流」の効果は、99年の満足度(WB1)には性差モデル(女性>男性でパネル差なし)が支持されたが、WB2への総合効果では、パネルA(新規標本)のみ女性における効果が有

意であった。子どもや友人等との私的交流と生活満足度との関連が、男性高齢者より女性高齢者においてより強いとの結果は、Pinquartらのメタ分析の結果とも一致している。しかし、抑うつに関しては、「子どもとの交流」「私的交流」の効果の男女差はみられなかった。

他方、「社会参加」は男性のみ、生活満足度を高め、抑うつを低めるという有意な総合効果を示した。ただし、男性においても、「社会参加」の各時点の抑うつ傾向への直接効果は小さく、統計的に有意ではなかった。

また、配偶者の効果の男女差はパネルの種類によって異なり、就労はWB2に有意な総合効果を持たなかった。

以上の結果から、WBへの効果の男女差に関する仮説は、抑うつよりも生活満足度においてより当てはまることが示された。

表1 3年後の生活満足度への総合効果  
(生活満足度99年経由の間接効果を含む)

ネットワーク99	係数	新規A 男性	新規A 女性	追跡B 男性	追跡B 女性
配偶者	非標準化	-.112	.423*	.547*	-.239
	(標準化)	(-.023)	(.118)	(.107)	(-.068)
子ども交流	非標準化	-.031	.152*	.078	.204*
	(標準化)	(-.023)	(.111)	(.056)	(.144)
私的交流	非標準化	.197	.444*	.027	.093
	(標準化)	(.096)	(.217)	(.013)	(.042)
社会参加	非標準化	.445*	.124	.482*	.259
	(標準化)	(.181)	(.051)	(.217)	(.114)
就労	非標準化	.285	.000	.108	.028
	(標準化)	(.076)	(.000)	(.029)	(.006)

5%水準で有意な総合効果に\*を付した  
 $\chi^2(df=456)=902.2, p<.001, CFI=0.95, RMSEA=0.02$

#### (5)今後の展望—残された課題

##### ①男女差と社会関係の果たす機能

先行研究も本研究におけるデータ分析でも、社会関係の多寡や、社会関係とWBとの関連には男女差がみられており、性別は重要な個人属性の1つである。年齢や学歴などは、性別によっても分布が異なることから、これらの個人属性を検討する際にも、性別の影響を無視することはできない。

上記(4)の分析結果によれば、女性はインフォーマルな関係、男性は社会参加が、WBによりポジティブな効果をもっていたが、なぜそのような男女差があるのかを説明するには、それぞれの社会関係が果たす機能について、さらなる解明が不可欠である。例えば、親密な相手から情緒的なサポートを得ること、社会参加を通じて自己実現をはかったり、他者への貢献を行うこと、あるいはより多くの多様な人とつながり有益な情報を得ることのどの要素がWBにとって重要なのか、その重み付けが性別などの個人属性によってどのように異なるのかを、データに基づいて

明らかにするということである。

また、このような社会関係の機能を明らかにすることで、WBの指標（生活満足度、抑うつ傾向）によって結果が異なる理由についても説明可能になることが期待される。

##### ②年齢と社会経済的地位による差異

文献レビューや一部のデータ分析では、年齢層別の差異についても検討したが、明確な知見が得られたとは言いがたい。図2のような共分散構造分析のモデルを、年齢層と性別で分けた多母集団で分析したり、前期高齢者を対象としたデータでも、70歳以上を対象とした上記(4)と同様の結果になるかを確認する必要がある。

親友数や所属グループ数などのネットワーク規模は、就学年数や収入が高い高齢者ほど大きい傾向があった(小林・Liang,2011)。しかし、これらの社会経済的地位によって、社会関係とWBとの関連性に差異があるかについては、先行研究がほとんどなく、本研究においても分析に至らず、今後の課題として残された。

また、本研究では、パネルデータを用いた分析を行ったが、これには、時間的に先行して測定された社会関係から3年後のWBへの効果という、因果関係の方向性を特定しやすい利点があった反面、追跡期間中に社会関係が変化したことが結果に影響を与えた可能性が否定できないという問題もあった。

高齢期の社会的ネットワークの変化を分析した結果では、グループ参加を含む友人など非親族との関係については、加齢に伴いネットワーク規模や接触頻度が減少し、特に後期高齢期には減少の程度が大きいことが示されている(小林・Liang,2011)。このように、社会関係の安定性は、社会関係の種類や対象者の年齢によっても異なると考えられ、パネルデータを用いて年齢層別にWBへの効果を比較する際には、この点への配慮が必要と思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 小林江里香, Jersey Liang (2011).高齢者の社会的ネットワークにおける加齢変化とコホート差: 全国高齢者縦断調査データのマルチレベル分析. 社会学評論, 62(3), 356-374.
- ② 小林江里香, 藤原佳典, 深谷太郎, 西真理子, 斎藤雅茂, 新開省二(2011).孤立高齢者におけるソーシャルサポートの利用可能性と心理的健康: 同居者の有無と性別による差異. 日本公衆衛生雑誌,

58(6), 446-456.

以上、査読有り

〔学会発表〕(計3件)

- ① 小林江里香, 深谷太郎, 杉原陽子, 新開省二, Jersey Liang, 秋山弘子: 社会的ネットワークの種類別にみた高齢者の心理的ウェルビーイングへの効果の男女差—全国高齢者パネル調査データの分析. 日本老年社会科学会第54回大会, 長野県佐久市, 2012.6.9-10.
- ② Kobayashi, E., Fukaya, T., Shinkai, S., Akiyama, H., & Liang, J.: Age, Cohort, and Gender Differences in Social Networks among Japanese Older Adults: Findings from Japanese Longitudinal Study between 1987-2006. The 64th Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of America, Boston, 2011. 11. 18-22.
- ③ 小林江里香, 藤原佳典, 斉藤雅茂, 深谷太郎, 他5名: 首都圏ベッドタウンにおける独居高齢者の特徴(その1)—親族・非親族ネットワークと抑うつおよび将来への不安. 日本老年社会科学会第52回大会, 愛知県知多郡, 2010.6.17-18.

〔図書〕(計1件)

小林江里香(2012). ソーシャルネットワーク. 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子編「発達科学入門 3巻 青年期～後期高齢期」, 東京大学出版会, pp.183-200.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

小林 江里香 (KOBAYASHI ERIKA)  
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター (東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・主任研究員  
研究者番号: 10311408

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

深谷 太郎 (FUKAYA TARO)  
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター (東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究助手  
研究者番号: 80312289